［二〇二二年度大会シンポジウム］特集　人と動物のかかわりの思想史

近現代日本における猫への眼差し——室生犀星・谷崎潤一郎を題材に——

真辺　将之

はじめに

空前の猫ブームと言われて久しい。猫の絵画に関する展覧会が頻繁に開かれ、猫に関する小説やエッセイの類を集めたアンソロジーも多数編まれている。他方で、そうした絵画や「猫好き」の文章をもとに、「日本人は昔からずっと猫が好きだった」と安易な論じ方をする書物も多い。しかしそれは現在の「猫好き」の目線をそのまま過去に投影した、きわめて非歴史的な議論である。問われるべきは、人間の猫への向き合い方がいかなる変遷を辿ったのか、そしてその背後にいかなる社会状況の変容があったのかであろう。筆者の『猫が歩いた近現代』（吉川弘文館、二〇二一年）はそうした問いへの一つの回答であったが、しかし同書の通史的叙述においては、個々人の猫への目線や多様性は捨象せざるをえなかった。本報告では、室生犀星と谷崎潤一郎を題材に、猫に対する眼差しのあり方の多様性と、その変遷の様相を、二人の個性をふまえて描き出したい。

一　室生犀星と捨てられた黒猫

大正期以降の文筆家には猫好きとされる人物が多いが、前著でも指摘したように、近世から明治期においては、「猫好き」の文筆家は少数派であった。前近代の文芸作品

において、猫はほとんどが擬人化によって描かれ、実際には猫で人間を描いているものがほとんどであった。文学が強く道徳に規制されている中では、猫は人間より一段低い畜生、そしてその畜生のなかでも道徳性において犬より劣る存在として描かれた。大正期以降になって、猫好きの文筆家が増えていく背景には、近代文学の確立＝文学の道徳からの解放と、近代的な科学の普及によって猫が人間から切り離され、猫が猫としての存在のままで認識されるということが前提としてあった。さらに、近代まで人間が猫を飼う理由は、ネズミ捕りのためであったが、現代に近づくにつれて、人々は猫をネズミ捕りのためではなく、純粋なペットとして飼育するようになる、今回扱う室生犀星も、谷崎潤一郎も、ともにネズミ捕りのために猫を飼育しているわけではない。この二人は、猫を猫として描く点で近代的な目線で猫を描き、かつ純粋なペットとして猫を飼育していたという点では、現代の先駆でもある。

室生犀星は愛猫「ジイノ」の写真で知られ、猫好きの文豪の代表格として扱われることが多い。しかし犀星が、引越しをした際に前の家に戻ってしまい、汚れきった無惨な姿で連れ戻された黒猫を「余り不潔だから」と捨てさせ、さらにその猫が戻ってくると今度は、「重石をつけて海に沈めて」しまえと持って行かせたと随筆に記している[1]ことは知られていない。また別の随筆では猫を嫌いだと述べている[2]。こうした事実をどのように考えたらいいのであろうか。犀星と猫に関しては、劉金挙・王宗傑の研究[3]が存在するが、あくまで作品論で、本稿とは問題関心が異なる。ただし同研究において、犀星が「猫を家族の一員としてみなし」ていたと論じているのは、現代の猫好きの心を投影した乱暴な規定であろう。

犀星は、「郷里は寒国で猫を飼ふ家が多かつた[4]」「猫の耳を子供時分には好んでかんでみた[5]」というように子供の頃から猫に接して育った。一九一〇年に二一歳で上京してほどない頃には、下宿先で子猫を飼育するが、貧乏ゆえ友人の家を寄食して回るうちに子猫を餓死させてしまい、「小猫を双手に抱きしめて、欷歔嗚咽」していたという。その目撃者によれば犀星が猫を飼ったのは「猫の毛並を好む一念」からであったともされている[6]。

犀星は一九一八年に結婚し家庭を持つが、新婚当初、妻の求めによって白猫「チビ」を飼っている。しかし、小説での描写は、妻の猫へのかわいがりようについて、「あんなに可愛いものだらうかと、私はすこし恐ろしいやうな気」になった[7]とか、「これはこの女の病ひだ[8]」と冷めた眼で見る描写がある。チビは一九二〇年四月二日に病気で死ぬが、家族があまり激しく泣くので、犀星はそれを叱った

と日記に記している。[9] 独身時に猫の死を欷歔して悲しんだ犀星が、このときにはむしろ猫の死を悲しむ妻を叱りつけ、また小説や随筆などにおいても、猫は女が愛するものと捉え、猫への過度の愛を戒めているのである。

なお、チビが死ぬ直前の様子を描写した日記に「眼ばかり美しく、からだがくたくたに瘠せていた」[10]と、猫の眼に注目する記述があることは、その後の犀星の猫の描写に通じており、注目すべき点である。また、これと関連して、猫の「不気味さ」に関する叙述も、犀星の小説のなかには見られる。たとえば「麦猫は、……感情をも盗み読みするやうな眼色をしてゐた」「〔猫は〕瘠せて尖った顔のなかに、眼ばかり鯖いろをしてゐて鋭かつた」「猫はそのときにやりと微笑つたやうな気がした」というような記述である。[11] ここでも猫の眼に着目し、瞳の奥にある猫の思考が不気味さと結びつけられ、さらにそれが猫を愛する女性の姿とも重ねられる。「愛猫抄」にも猫の瞳への着目や、それを愛する女性の執念深さの記述が見られる。猫の瞳の奥に底しれぬ不気味さを感じ、さらにそうした生き物を熱烈に愛する女の執念深さと不気味さとを重ね合わせるのが、この時期の犀星の特色であった。

以上述べてきた白猫の次に、室生家で飼ったことが確認できるのが、後に犀星によって捨てられることになる黒猫である。この黒猫は、関東大震災後、金沢に戻って住んでいた時期に、貰ってきたものであった。十数年来、「牝で尾の長い黒猫」を欲していてやっと見つけた待望の猫であり、犀星はこの黒猫を「生きてゐる書画骨董の類に近いもの」「美しさに惚々する気持であつた」と述べている。[12] この時期の犀星にとって愛すべき猫の条件は美しい毛並みにあった。しかしその後、一九三二年四月に、大森谷中から大森馬込に引っ越すが、この猫は繰り返し前の家に戻ってしまう。「黒猫はひと月もかへつて来ないあひだに、鳶のやうな鋭い眼の光を持ち、のら猫の猾い逃脚と疑ひ深い心をもつやうになり、女房や女中が連れに行つても馴染みを逸れた卒気ないふうをした」[13]と、この時も犀星は猫の「眼」から、猫の「心変わり」と「執念深さ」を読み取っている。素晴らしい毛並みは今や見る影もなくみすぼらしい姿に変わっていた。犀星がこの猫に愛情を注ぐ理由はなく、それが「海に沈めてしまふやうに」との指示につながったのであった。

二　その後の犀星と猫

室生家では、実は犀星よりも妻のとみ子の方がはるかに猫好きであった。しかしとみ子が長年にわたって愛した猫

の「ミュン子」にも、犀星は冷たい態度を取り続け[14]、特にとみ子没後には、「ミュン子に対する父の風あたりというものは、大変にひどいもの[15]」となった。ところがミュン子在世中の一九五〇年七月に、犀星は軽井沢の別荘の裏山で出会った子猫を飼い猫にしている[16]。「毛色は悪く顔も好くない山の上の棄猫を飼ふやうになつたのは、ただ、ひとつ眼つきが優しく、ひとみはどうかするとほくろのやうに小さく、トゲ立つてゐないからである[17]」と犀星は書いており、毛色ではなく「眼つきが優し」いがゆえに、気に入ったのであった。しかしこの猫は九月初頭、自転車に轢かれて死ぬ。犀星は眠れなくなり睡眠薬を服用、それでも「終日ニヤンニヤンの細いながい優しい声が、耳のまはりにきこえ、あはれさは尽きなかつた[18]」という。しかしこの経験を経ても、犀星のミュン子への姿勢は変わらなかった。その後も、犀星が気まぐれに野良猫を可愛がったり、逆に猫を捨てたりを繰り返していることも日記からわかる[19]。

火鉢に手を置いている写真で有名な、犀星の愛猫ジイノは、一九五七年に庭に迷い込んだ猫であった。室生朝子『うち猫そと猫』では犀星が可愛がった猫として描かれるが、犀星存命中に朝子によって書かれた随筆[20]では、「一応人様の手前は父の所有物となってはいるが、私は私の恋人だ位に、家に来られる方達にはなしていた」と、筆致がかなり異なっており、朝子が愛した猫として描かれている。ジイノが行方不明になった際も、母と朝子が大変に悲しんだ記述はあるが、犀星が寂しがったとは一切書かれていない。犀星存命中の記述の方が信用でき、火鉢の写真ゆえに犀星の猫としてのイメージが強いが、実態としては朝子の飼い猫だったのだと思われる。

犀星の最愛の猫と言われるのは、犀星が最後に飼育した「カメチョロ」であった。犀星は、当初軽井沢での避暑の期間、軽井沢の大工の家の猫「カメチョロ」を借りて遊んでいたが、後にそれを東京に連れて帰った。同じ頃、犀星は新聞紙上で、田中澄江と「愛猫雑談」を行ない、「猫はずるいほどよい」「女の人の安心しきった愛情の現はし方にはっとすることがたびたびある」「女の人の大きい顔容に猫はとろけてすべり込み、猫の目と彼女の目とが入れかわって、かがやいてくる」などと語ったと述べている[21]。犀星が自分を「猫好き」であると公言し、かつ、かつて悪く描いていた猫のずるさを肯定的に評価し、また猫が女性を愛する姿をも魅力的に述べるなど、相当な変化が見られる。

しかし、同年一二月二六日にカメチョロは黄疸と診断された病で死去してしまう。犀星はひどく落胆した姿を朝子に見せ「猫はもう当分飼わない」「生き物はもうこりごりだ。疲れたね」としみじみと言ったという。以後、犀星が

猫を飼うことはなかった。カメチョロの死を、カメチョロという個別の猫の死とだけ捉えるのでなく、猫自体を、いや、動物を飼うのをやめようと考えた犀星の姿勢はそれまでとは明らかに違うものであった。カメチョロをきっかけに、晩年の犀星は愛猫家となり、そして愛猫家となったがゆえに、猫を飼うのをやめたのである。カメチョロ没後に書かれた小説「猫王の死」では、主人公の女性カメ子（「カメチョロ」に由来すると考えられる）が猫を愛するさまが描写されているが、「カメ子は動物のコリコリした耳を噛み、足の豆を噛み、手と足とをにぎりしめ、その顔に自分の顔を擦り寄せるしつこさに際限がなかった」と、猫の耳を噛むのが好きだった犀星自身の行為を埋め込んでいる。[22] かつて女性の猫への執着に呆れ批判的であった犀星が、いまや自分のなかの猫を愛する女性性を強く自覚し肯定するようになったのである。結婚後の犀星が、かつて独身時代には人前でも見せていた猫の死を悲しむ姿勢を封印した背景には、おそらく結婚し家長としての自覚を強く持したためもあったろう。妻に先立たれ、娘も成人した晩年の犀星は、自らの女性性を認め、猫好きであることを公然と認めるに至ったのである。

三　谷崎潤一郎と猫

谷崎と猫との関わりについての基礎的事実については、いくつかの論文で触れられている。[23] しかしいずれも谷崎の文学作品への評価に付随して触れられたもので本稿とは問題関心が異なる。谷崎が初めて猫を飼ったのは横浜に在住していた一九二一～一九二三年の間で、一九二三年の兵庫移転以降に、本格的に猫を飼い始めるが、飼育した猫のほとんどが洋猫であることが特色である。谷崎は洋猫の美を愛し、日本猫をほとんど評価しなかった。また谷崎が小説のなかで猫を中心的なテーマにしているのは、『猫と庄造と二人のをんな』と、掲載一回で中断された「ドリス」（一九二七年一月）のみである。いずれも登場する猫は西洋種であり、かつともに作中で猫を女性になぞらえた描写があることが特色である。

谷崎の場合、犀星同様猫を女性になぞらえつつも、それを愛するのは男性である。また猫を薄情とする伝統的な観念に異を唱え、むしろ愛情に深いのにはにかみ屋であるところがいいのだとも述べる。[24] とはいえ、最も重視されるのは性格よりも猫の美しさであり、かつその持論は晩年に至るまでほとんど変化を見せなかった。[25] またそこでいう美し

さは、いわゆるケインズの美人投票の如きものではなく、あくまで自分独自の基準における美であった。自己の好悪が価値判断のすべての根拠であることは、たとえば、京都の別荘潺湲亭にいたミイとノラという二匹の猫が、身体の大きさも毛並みも、まるで同じであったにもかかわらず、ミイだけをかわいがったというエピソードにも通じている。[26]

なお、当時、谷崎のように、洋猫のみを愛し、また猫を美しいものとして捉える人々は少なかった。『庄造』のなかにも、猫のトイレの悪臭が家中に充満し、また外から帰ってきた猫の足の汚れで家が汚れるというような記述が出てくるが、こうしたことに対処するのは谷崎の仕事ではなく、女中および妻の仕事であった。当時は猫嫌いの女性も多かったために、谷崎は常に動物好きの女中を雇うようにしていたという。[27] 愛猫「初代ペル」が亡くなった際の記述を妻の松子が残しているが、最後の苦しみのさなかで世話をしていたのは女中と妻の松子であり、谷崎は朝になってその死を知らされた。[28] 谷崎家の女中をモデルにした小説でも、「猫の糞の始末をするのが女中たちのひと仕事」「猫は大概な女中が厭がります。うつかりしてゐるとお座敷で粗相をしまして衣類や布団などを汚す、刺身や焼き肴に気を配つてゐないと浚つて行かれる、そのたびごとに主人に叱事を云はれたり洗濯物が殖(ママ)えたりする」[29]という記述が見られる。

谷崎の、あくまで美として美しい存在としての猫の愛で方は、戦後の洋猫ブームを、戦前において先取りしたものであるということができる。しかし、他方で、戦後の猫ブームが、ブランド価値の上に成り立っていたのに対し、谷崎の場合は、ブランド価値ゆえに愛するのではなく、自分の内面の価値観に基づく強烈な自己主張であった点は大きく異なっている。

おわりに

犀星・谷崎ともに、猫の毛並みの美しさを評価している。また猫を女性的なものと重ね併せている（ただし、犀星の場合は猫を愛するのは女性で、谷崎の場合は男性であった）。さらに彼らが猫の美を愛でることができたのは、女性たちが猫の汚穢な部分の始末を引き受けていたからであった。猫の美に対する評価は、ジェンダーと深く絡まり合っていた。

犀星も谷崎も、猫を猫として描写し、猫の思考への推察はあっても、文章のなかで猫自体に喋らせるなどの擬人化は行なっていない。とはいえ、犀星の場合、猫の眼を通して、その奥に心情を読み取ろうとしている点において、前近代的な猫観との接続も見られる。猫の内面を観察すると

同時に、その瞳に映る自己の内面をも冷静に観察した犀星は、それゆえに猫への向き合い方において、揺れ動いた。他方で、谷崎は、犀星ほどに猫の思考を追おうとはしておらず、猫観は生涯一貫していた。「此の猫は戸でも襖でも障子でも、引き戸でさへあれば人間と同じに開ける、……だが畜生の浅ましさには、開けるばかりで締めることを知らない」[30]というように、谷崎は賢い猫であっても、所詮は畜生だと突き放してもいる。猫の内面を推し量る＝より人間と猫の近さを感じる犀星が、それゆえに猫を嫌うそぶりを見せるのとは対照的である。他方で、犀星には、人間と猫との区別の絶対性が見られることも事実である。犀星は小説や随筆において、猫を決して個別の名前で記さない。猫の名前を記す谷崎とは異なる。

以上のように、両者の猫観は、近代のなかでも、一方で前近代との、他方で現代と接続の要素を持ちつつ、しかしそこにはそれぞれの個性が介在しており、一筋縄では理解しえないものであった。現代の猫好きからみれば、彼らを果たして「猫好き」と言えるのかという疑問は生じるであろうが、両者を「猫好き」ではないと断ずることもまた、現代人の猫好きのあり方を絶対視する前提の上に成り立っていることは自覚せねばなるまい。

注

(1) 室生犀星「ねこはねこ」(『花霙』豊国社、一九四一年)。
(2) 室生犀星「犬猫族」(『花霙』)。
(3) 劉金挙・王宗傑「犀星文学における「猫」とその意義」(『室生犀星研究』四一・四三、二〇一八年一二月・二〇一九年一〇月)。
(4) 室生犀星「フレミーの猫」(『時事新報』一九二八年一一月七日・八日)。
(5) 室生犀星「秋日閑談」(『読売新聞』一九六〇年一〇月四日)。
(6) 藤沢清蔵「渠に云ひたいこと」(『新潮』三三―一、一九二〇年七月一日)。
(7) 室生犀星「結婚者の手記」(『中央公論』三五―二、一九二〇年二月)。
(8) 室生犀星「冬近く」(『週刊朝日』二―二五～三―四、一九二二年一二月～一九二三年一月)。
(9) 室生犀星「四月の日記」(『新潮』三二―五、一九二〇年五月)。
(10) 同前。
(11) 前掲「冬近く」。
(12) 前掲「フレミーの猫」。
(13) 室生犀星「愛犬鉄の死〔畜類哀史〕」(『現代』一四―

一〇、一九三三年一〇月）。
（14）室生朝子『あやめ随筆』（五月書房、一九五九年）。
（15）室生朝子『母そはの母』（東都書房、一九六〇年）。
（16）室生犀星日記、一九五〇年七月五日～九月二九日条（『室生犀星全集』別巻二、新潮社、一九六八年）。
（17）室生犀星日記、一九五〇年七月三〇日条（『室生犀星全集』別巻二）。
（18）室生犀星日記、一九五〇年九月八日条（『室生犀星全集』別巻二）。
（19）室生犀星日記、一九五三年二月二三日条～四月一七日条（『室生犀星全集』別巻二）。
（20）前掲『あやめ随筆』。
（21）前掲「秋日閑談」。
（22）室生犀星「猫王の死」（『小説新潮』一五―四、一九六一年四月）。
（23）最新の研究として佐藤未央子「谷崎潤一郎「ドリス」試論」（『同志社国文学』九八、二〇二三年三月）。その他の研究も同論文参照。
（24）谷崎潤一郎「ねこ」（『週刊朝日』一九二九年二月二四日）。
（25）例えば谷崎潤一郎「猫を飼ふまで」（『サンデー毎日』一九二七年六月一五日）や前掲「ねこ」の議論は、戦後の、谷崎潤一郎「猫と犬」（『当世鹿もどき』、『週刊公論』三―二七、一九六一年七月）においてもほとんど変化していない。
（26）伊吹和子『われよりほかに』（講談社、一九九四年）。
（27）前掲「猫と犬」。
（28）谷崎松子「猫と潤一郎と私」（『中央公論』四五―一一、一九六七年一一月）。
（29）谷崎潤一郎『台所太平記』（中央公論社、一九六三年）。
（30）谷崎潤一郎『猫と庄造と二人のをんな』（創元社、一九三七年）。

（早稲田大学教授）